

## 加害者

夏の日差しも弱くなり、ここ東京もようやく秋の季節になってきたようだ。数日前から体調が優れておらず寝てばかりだが暑くないのは喜ばしい。河川敷でホームレス生活をしている俺には、冷房がある環境などない。真夏に風邪を引かなくて良かったと思う。

どうして自分はホームレス生活をもう3年もしているのだろうか：今まで軌道にのつていた自営業の規模を拡大しようと新規事業に手を出したのがまずかった。銀行から金を借り、様々なことをやってきたが最終的には失敗した。借金は当初借りた額の倍に膨れ上がり、妻は離婚届を突き出して高校生の娘をつれて出ていった。父・母は既に他界し、俺の周りにお金を肩代わりしてくれる人もおらず、あえなく自己破産をしたのが三年前の40代後半のことだった。こんな何十回も思い出したことをまた、この窮屈なダンボールの小屋の中で思い巡らせてしまった。

もう数日ご飯を食べることも小銭を稼ぐこともしていない。俺の手元には菓子パンをようやく一つ買えるくらいの僅かなお金のみ残っている。近くのスーパーへ行き賞味期限間近のものを買おうかと、俺は重い腰をあげた。店にたどり着きパンを口に含んだとき栄養が全身に行き渡るような感覚と共に、わずかながら体力の回復を感じた。このまま河川敷に戻っても良いが、久しぶりに体を動かしたくなつたため街中を散歩することにした。

二駅分は歩いただろう。折り返して戻ろうとしてすぐそばの建物を見たときカーテンの隙間から家の電気が点いていないこと、人が動いている様子がないことが分かった。一人用のマンションぽいが見た目は新しそうだ。数万円でもあればしばらくの間は楽な生活ができるで一瞬思ったのが悪かった。次の瞬間には窓ガラスを割る石を探していた。手に収まるくらいの鋭利な石を見つけ近くに通行人がいないことを確認すると腕を振りかざし窓ガラスを割る。硬質な音を立ててガラスが砕け散った。大きな音はしてしまったが無事に穴を開けることができた。手の中に入れ窓ガラスの鍵を開ける。大きな音は一度立ててしまったがそつと入ることにした。六畳くらいの平均的な部屋の大きさで、ゆっくりと部屋全体を見回してみる。部屋の隅にあるベッドに目線をやると、そこには驚いた様子の若い女性が俺を見ていた。誰もいないと思っていたがまさか人がいるとは思ひもしなかった。騒がれると困るので丁度側に置いてあったビニール紐で手足を縛り声を出せないように口にタオルを突っ込む。お金さえ手に入れることができればさっさと逃げる予定だった。

「金がない。大人しくしとけば命を奪うようなことはしない」

そんなことを言いながらタンスやクローゼットの棚を開けていると渋沢栄一の顔が印字された紙が四枚ほど手に入った。欲しい物が手に入り玄関から逃げるため廊下の方へ進んだ時に振り返ると女と目が合った。若い肉体がそこにある。かつての成功も、家族も、全てを失った空虚な日々の中で、忘れていた何かが腹の底から熱くこみ上げてきた。もう何十年も若い子の体に触れていない。体中に血が駆け巡り、脳髓がしびれるような快感と共

に、底知れぬ欲望が津波のように押し寄せる。理性などそこには既に無かった。逃げることを止め女の体の上に覆いかぶさる。はやる気持ちを抑え切れない。服を無理矢理たくし上げた。満足しきって外へ出てマンションを振り返ると思わず笑みがこぼれた。思わぬ幸運があったことに高揚感を感じながら河川敷にあるダンボールハウスへ帰った。

## 被害者女性の彼氏

今のままでも十分幸せである。嫌われるかもしれない、これまでの友人関係はなくなるかもしれない。けど、もっと仲良くなりたいたいから勇気を振り絞ろう。何かを失う覚悟のある者だけが何かを得ることができる。覚悟のないものは何も成し遂げられない。だから俺は告白をした。結果論にはなるがやっぱり告白して良かったと思う。自身が恋い慕い大切にしたいと考えてる紬と恋人関係になり早二年。彼女とはたくさんの時間をともに過ごし楽しいことをたくさん行った。今日はそんな彼女との二年記念日である。午後五時に駅前で待ち合わせ。今日は告白した日と同じように映画を見た後、夜ご飯を食べる予定だ。だが彼女は待ち合わせの場所に来ない。普段は時間どおりに来るはずなのに。そういうこともあるかとしばらく待ってみる。だが三十分経ってもやってこない。連絡しても既読すらつかない。流石に心配になり彼女の家に行くことにした。物が散乱している部屋の中に、一糸まとわぬ姿でベッドの上で虚ろな目をしながらただ一点を見つめている一人の女の子がいた。その目には光がなく、魂が抜けてしまったかのようなようだった。部屋には、何か鋭利な物で切り裂かれたかのような冷たさが漂っていた。

「おいどうした？」

「なにがあった？」

何十回も声をかけたときようやく彼女は自分が傍にいることに気づいた。その声は普段の天真爛漫な彼女の像からはかけ離れた別人である。

「あっ、来たんだ…」

「待ち合わせに間に合わなくてごめんね。今からすぐ準備するからさ、ちょっと待ってもらってもいい？ごめんね。デートする時間短くなっちゃって」

そう言いながら紬は起き上がり準備を始めようとするが、よろめく足取り、震える手。この様子と家の惨状を鑑みるに何も知らないまま出かけることは出来なかった。

「ねえ、何があったの？この様子を見る限り何か起こったでしょ？教えてくれない？」

こう何回か尋ねていると

「怒らない？幻滅しない？」

そう確認しながら紬は説明を始めた。昼寝中気づいたら傍に知らない男がいたこと、

家をあさられたこと、服を脱がされたこと。嗚咽を漏らし、何度も言葉に詰まりながら、絞り出す告白を俺はただ聞くしかなかった。その一つ一つの言葉が胸に刺さる。守ってやれなかった。俺はなにもしてやれなかった。

「警察に連絡する？」

「それはやだ：怖い、行きたくない」

全てを拒絶していた。こういう犯罪がらみの話は初めてだ。自分には何もすることが出来ないことが悔しい。だが本人の意思を尊重するのが一番だろう。

「そっか、紬がそうしたいと思うのならそうしよう」

「うん、ごめんね。」

「謝る事なんて無いよ。紬は悪いこと何もしてないでしょ？今日はゆっくりしよう」  
「うん」

せつかくの記念日であって素敵な一日になるはずだったのに。紬にこんな事をさせた男を許すことなど出来ない。今すぐにでも警察に突き出したいが、身勝手に彼女の思いに反する行動をするわけにはいかない。今は自分に出来ることを最大限しよう。

紬の家に男が入ってから約一か月が経った。何事もなかったかのような素振りで仕事に出かけている。しかし、あの日以来紬は自分の殻に閉じこもったままで笑うことが無くなった。仕事の合間を縫い、可能な限り会うようにしている。少しでも心が癒え、プラスの感情が働くよう好きなスイーツを持っていくなどしている。だが何をしても無駄なんだ。

紬の立場になって考えると心底胸が痛む。何かをしてあげたい。自分は彼氏として一番傍にいて守ってあげるべき存在なのに何をしてあげたらいいのだろう。「大丈夫？」という無神経でありきたりな言葉くらいしか、かける言葉が思いつかない。そして、良かれと思って行っている俺の行動はかえって紬を傷つけている可能性もある。そんな心を癒してあげることが出来ない自分が不甲斐なく憎い。紬は以前みたいに笑顔を沢山見せる女の子に戻れるのだろうか：もう俺は傍にいる資格はないのかもしれない。

## 被害者女性

今日は朝から幸せな気分だ。二年前の大学生だった今日、同じクラスメイトの陽翔と映画を見に行った夜に彼から告白をされた。その日からの日々を振り返ると就職活動や卒業研究など大変なことは沢山あったが彼と過ごす日々は非常に楽しく一瞬であった。お互い社会人一年目となる今日は午前だけ仕事に出ていた。約束の時刻は17時か。そんなことを考えながらベッドでダラダラしているといつの間にか寝ていた。大きな音によって目が

覚めた。何事かと目を擦りながらベランダの方へ目をやると片手に石を持った中年の男がびっくりしたような目でこちらを見ている。驚きで動けないでいると襲いかかって来た。そのまま手と足をちょうどその場に突いた紙束を束ねるビニール紐でくくられる。紐が足に食い込み痛い。口にはタオルが突っ込まれ息がしづらい。男は無表情な顔で、

「お金がない。大人しくしとけば命を奪うようなことはない」

そう言っただけでタンスやクローゼットの棚をあさり始める。数分後どうやら目当てのものが見つかったようだ。玄関から逃げるのか廊下の方へ足を運んだ際振り返ったとき目がある。野生の動物が獲物を見つけた時のような欲望に満ちた奥底の計り知れない恐ろしい目をしていて。そこから「ターン」して私に覆いかぶさってくる。強烈な体臭が鼻につき、吐き気がこみ上げる。服を無理やり脱がされ上半身を露わにされる。乳房を触られ嫌な感覚が全身にめぐる。スカート・下着も脱がされる。冷たい手が私という存在をモノのように扱った。抵抗したいのに反撃できない。手を縛られ、できるのは体を横にずらすくらいだがそんなの無意味だ。男が腰を振っている。目の前の現実はいくらにも悍ましく、汚い。そんな顔見たくない。顔を背け、ただ終わるのを待つだけだった。意識の隅で、私は壊れていく自分を感じていた。

それからどれだけ時間がたったのだろう。永遠に感じられた。自分が誰なのかも分からなくなった。

「大丈夫？」

そんな声が横から聞こえてくる。頑張っただけ顔を横にするとそこには彼氏の陽翔が心配そうな顔をしている。

「あつ、来たんだ」

陽翔の顔を見ると同時に悪夢から引き戻されデートの約束をしていたことを思い出した。この世で一番見られたくない姿を今一番見られたくない人に見られてしまった絶望が漂ってきた。ベッドの上でこうしてゆっくりにしているわけにはいかない。早くこの惨状を隠さなければ。

「待ち合わせに間に合わなくてごめんね。今からすぐ準備するからさ、ちょっと待ってもらってもいい？ごめんね。デートする時間短くなっちゃって」

必死で笑顔を作ろうとするが、頬が引きつった。

「ねえ、何があったの？この様子を見る限り何か起こったでしょ？教えてくれない」

陽翔は優しく聞いてくれるが実際あったことを言うと思うのか怖くて言い出せない。この身体に残された男の遺恨がこびりついていていようで気持ち悪い。だが一人で抱えきれない。

「あのね、昼寝していたんだけどさ、気づいたら知らない男の人が目の前にいてね、お金奪うって言ってさ家の中をあさったのね。」

陽翔は何も言わず私の言葉を待ってくれている。安心する。

「それでさ、服をぬがされたんだ」

そこまで言うのが限界だった。陽翔が息を呑むのが分かった。違う、それだけじゃない。もっと酷いことをされた。でも、それを言ったら？この優しい彼が、私をどんな目で見えるだろう：汚らわしいと、軽蔑するだろうか？その視線に耐えられない。全部を伝えることは何が何でも出来なかった。幻滅されたくない。離れて欲しくない。穢れてしまったから、素敵な彼の隣に居れるはずもなく、離れられても当然なのに。全部説明しないといけないだろうが：

「警察に連絡する？」

そんなことも考えなきゃならないのか、ただ被害を受けてしんどいのにそんな手続きも。陽翔には伝えたことが無いが、実は以前にも今日ほどではないが同じようなことがあった。電車内での痴漢だった。当時は高校生で駅員さんに連絡して警察を呼んでもらった。警察は来て話を聞いてくれ、「犯人が見つかるように努力します」そう言ってくれたけど、結局誰だったのかは分からなかった。そりゃそうだ。多くの人が使う駅でたった一人を見つけるなど不可能だ。分かっただけがやはり残念だった。今回もどうせ犯人を見つけることは出来ないだろう。どれだけ丁寧に扱ってもらえるかは分からない。以前よりも手続きが大変なのは目に見えてる。こう考えると警察に連絡しなくてもいいのかなって。またあの時のように、何も解決しないまま傷だけが残るだけでは無いか。二度とあの男の顔など思い出したくもない。忘れようとしているのに、事情聴取で無理矢理記憶を掘り起こされるのはごめんだ。

「それはやだ：怖い、行きたくない」

陽翔はしばらく悩んでいたが私の考えを受け入れてくれた。

「ごめんね、巻き込んだじゃって」

「そんなことないよ。出来ることはするよ」

その言葉に甘えることにした。今日はゆっくりすることにした。

事が起こってから一か月がたった。あれ以降あの日見た男とは直接出会っていない。だが、また会って何かされるのではないかという不安はずっとある。毎日のように夢に出てくる。覆い被さってくる悍ましい顔と、あの体臭で悲鳴を上げて目が覚める。それが怖くて、夜が来るのが恐ろしい。疲れているが寝れない日も多い。少しの物音にもまた誰かが入ってくるんじゃないかと心臓が跳ね上がり、息が詰まる。

彼の優しい言葉も、温かい手さえも今は怖い。彼が触れてきてあの男と同じように、私の思いなんか考えず自分の欲求を満たすだけの行動をするのではないかと思い、体がこわばってしまう。そんなことするはずがないのに。大好きだった彼でさえ、そう思う自分が大っ嫌いだ。あの光景が、あの匂いが、あの感触が、嫌悪感とともに脳裏に焼き付いている。いつまでこれが続くのか。いつかまた何も起こっていなかった日にもどればいいと、ただ願うだけだ。だが、もう二度とあの頃の私には戻れないのだろう。